

第二期 第五十七号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2021. 04. 20 定有堂書店 発行

## 本屋トーク (ハイレゾリユーション)

奈良 敏行

(定有堂 店主)

本屋トーク (ハイレゾリユーション)

奈良 敏行

汽水のほとりから (1)

小原 修治

はじめての「やちむんの里」

丸 祐一

卒業式 オブ 卒業式

吉田 海将

大きな物語に巻き込まれないということ 三浦 永理

ケアとセラピーをめぐる I

松田 裕史

「学び祭」の頭の中

芝野 浩貴

カーマニアの明日はどっちだ?

萩原 俊郎

八代日記 (十三)

齊藤 仁昭

画中人

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その五十六

内田 克彦

戦禍の楽人 結

秦阜 梅林

ミニチュア

あきの素生

カエル姫

ドラマリア

…… 編集後記



入り口は内部にある。外見は往来にとけ込んで普通がいい。例えば棚の一角で、「猫が好き人は本が好き」という言葉に出合う。あるいは表紙を表にして自己主張する本が目にとまる。もしいずれかに惹かれたらそこが入り口。ここで出合う一冊はいままでの本とは何かが違う。入り口の扉もそこにある。(2021-57-01)

なにか新しいことがあるかなと棚に向かう。新しいことって何だろう。知っていることの書かれた本の群れに見知らぬ気配があれば、それは新しいことのはじまり。知っていることの組み合わせを変える知見が、未開の土地へ誘ってくれる。知っていることはもういい。知らないことに出合いたい。(2021-57-02)

ハイレゾリユーシオン、高解像度。知覚する情報の過剰がここにあり、とりまとめることによつて行為が生まれる。そしてこのとりまとめ方には個性がある。一種の環世界といえるだろうか。それぞれのイリユージョンが生成し、そして固有に生きる。しかしそれは分断のはじまりではないだろうか。

(2021-57-03)

見えるものより見えないものを語ろうとするのはなぜか。知っていることより知らないことへと知見をつみ重ねるのはなぜか。解像度が違うからだ。虫メガネで足下を見ながら外へ出ようとするといつまでたっても扉へたどり着けないといった人がいた。高解像度はリアルを毀損する。まだ外へは出たくない。

(2021-57-04)

本をゆっくり読む人とあわただしく読む人がいる。イメージの喚起を楽しむ人はゆっくり読む。意識を断片化してひとつの理念へ収束させる人は読むのが速い。学び系の人は結論を重視しないのでにえきらない。思索系の人は結論を急ぎつなかりを重視する。学び系のひとは悔恨をかかえる

人かもしれない。

(2021-57-05)

しばらく見ないなと気にしていた客が忘れた頃に顔を見せる。帰り際に二、三步戻つてきてA4のダンボール板にビニールパックした二冊の本を差し出した。「これ新品だからあげる」。スリッパも付いたまま。アマゾンで二重買したらしい。いい本だったので「ブルータス」と交換した。物々交換の思い出。

(2021-57-06)

縮み志向の本屋。いまは広がり時代の時代。モーターゼーション・グローバリゼーション・インターネットと拡散傾向。縮みは自己を時間と空間の中にどう再置するかの支度。縮小を結節点として本屋は甦りの物語を編む。すべてに応える力もないし必要もないと気づくと、何度でもやり直す力が湧き上がる。

(2021-57-07)

初発衝動のぶつ飛ぶ力。スタートを切つたらすでにゴールに入っている。何かをするために何かをするといことの愚かしさを四十年たつて知る。五坪弱で本屋をはじめた

人がまぶしい。十年くらい前から、縮小する本屋、身の丈がいいともいいつつけた。が、いつの間にか周囲はすでに、身の丈の人ばかり。

(2021-57-07)

読書の痕跡、トレーサビリティ。手にしている本をなぜ読んでいるか語れるだろうか。一つ前に読んだ本の中で出合うことも多い。その本をなぜ手にしたか。教えてくれた人は誰か。イリュージョン・環世界は本によって形成される。思考を生成する言葉の逆行・追行も可能だ。結局、言葉は属人性の由来をもつ。

(2021-57-09)

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示



太極拳教室 (会場 定有堂二階 葉香クラブ (荷葉))

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員



# 汽水のほとりから (1)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

月に数回だが、定有堂店内で奈良さんにお会いすると、きまつて本の話になる。数ヶ月前になるが、その時ご紹介いただいたのは、『戦士たちの貌―アフガニスタン断章』南条直子著(径書房) という古い本だった。88年に単身潜入したアフガニスタンで地雷を踏んで亡くなった写真家の遺稿集で、著者のことは『ヤクザと過激派が棲む街』牧村康正著(講談社) という本で知ったとのことだった。

80年代のアフガニスタンと言えば、一昨年暗殺された医師中村哲がペンシャワール会を立ち上げた時期に重なる。その中村氏が急逝される七ヶ月前、講演で鳥取市を訪れ、会に参加した私が入手したDVDをお貸しした経緯でこんな話をされたのかと思ったが、よく聞いてみると、奈良さんの興味は80年代のアフガニスタンではなく、著者の南条直子という人に対するものであった。その時、「ブレイデイみかこさんのような女性があの当時もいたんです

ね。」というふうなことを口にされたかと記憶する。

私は南条直子の名を知らなかった。『ヤクザと過激派が棲む街』の方は新刊で店内に売っていたので、即購入した。それが山谷争議団事件について書かれた本であることも購入の理由だった。この本によれば、南条直子は24歳で山谷に住み着き、33歳で客死するまで写真を撮り続けた。その記録は没後24年目に『山谷への回廊 写真家・南条直子の記憶 1979-1988』(アナキズム誌編集委員会)として世に出た。また、彼女は山谷争議団とも密接に関わり、労働者の傍らに寄り添い続けた。奈良さんはそんな彼女の「アナーキーな人生をブレイデイみかこ」と評されたのだ。今から五年前、本誌寄稿者の芝野浩貴氏と新宿二丁目にあるカフェ・ラバンデリアという店を訪ねたことがある。持ち回りの共同経営でその日たまたま居合わせた店主は、深夜の訪問にもかかわらず快く迎え入れ、色んな話をしてくれた。その際、壁際に置かれた大量の左翼系の書籍は昔この辺りにいた山谷争議団の元メンバーが残していたものと同った。争議団の存在を身近に感じた瞬間だった。

新左翼系の彼らが山谷に移り住んで暮らし始め、日雇い労働を斡旋しつつ賃金をピンハネして糊口を凌ぐヤクザらと衝突し、その抗争は殺人事件にまで至ったというのが山谷争議団事件のあらましである。殺人の引き金となった

ドキュメンタリー映画『山谷 やられたらやりかえせ』は、山谷争議団が残した遺産だが、正式に公開されていない。

なぜ私がこの事件に興味を持つかといえば、この事件が起きた80年代半ばは、ヤクザと左翼とが両者共に大衆の支持をほとんど失っていた時代だからである。両者共に、という点が重要である。なぜなら、両者は公権力に対して命がけで抗おうとする自治組織（コモン）という共通点を持つていたからだ。そうした組織を危険なものとし、逆に公権力を健全とみるメンタリティーは、この80年代半ばには大衆の間においても醸成されつつあったと思う。

高倉健に代表されるように、かつてヤクザ映画は大衆に圧倒的に支持されていた。左翼学生もまた、ヤクザの美学と無縁では無かった。東大紛争のさ中、一昨年亡くなった作家の橋本治が在学中の68年駒場祭のために制作した、「とめてくれるなおつかさん 背中のいちようが泣いている 男東大どこへ行く」という文句の添えられた有名なポスターも、こうした時代の文脈から理解すべきである。

冒頭で触れた医師中村哲の生き方に魅かれるのも、彼が火野葦平の小説『花と龍』の主人公のモデル玉井金五郎の孫だからだ。この小説は後に脚色され、ヤクザ映画としてもヒットした。高倉健も玉井金五郎を演じた一人である。玉井金五郎は、港湾で働く沖仲士の生活向上のために労働

組合を組織し、体を張って玉井組を名乗った。そんな祖父を真似るように、中村氏もまたアフガニスタンの人々の命を守るためにペシヤワール会を組織し、命がけで水路の建設に取り組んだ。二人に流れるのは、義の人の血である。義とは、義侠の義、義憤の義である。本来この義によつて立つのがヤクザであり左翼であろう。だから大衆は彼らを支持したのだ。ちなみに、火野葦平は玉井金五郎の息子で、中村哲の伯父にあたる。戦時中一世を風靡したこの作家は戦後、戦争協力者のレッテルを貼られ、自ら命を絶った。

橙書店店主の田尻久子が編集する『アルテリ』最新号にペシヤワール会理事の福元満治氏が寄稿している。それによれば、中村哲の『増補版 ペシヤワールにて』（石風社）所収の「トウキョウ」を撃て」という一文には、著者の、伯父火野葦平の無念に対する共感が充溢しているという。タイトルからも分かるように、これは88年夏に帰国した著者が目撃したバブルに浮かれる東京、いや、物の豊かさ に比例して人情が廃れ、利を求めるとつれて義を見失った 経済大国日本に対して放った痛烈なメッセージであった。

# はじめての「やちむんの里」

丸 祐一

(法哲学者)

ご縁があつて五年前から沖縄科学技術大学院大学(OIST)に年数回呼んでもらっている。しかしせっかくの沖縄にもかかわらずこれまでほとんど観光的なことをしてこなかった。那覇空港からタクシーでOISTのある恩納村に行つて

仕事をして一泊し、次の朝には鳥取に向けて帰るといふ流れだからである。ところがコロナ禍で飛行機の便数が少なくなつてしまった。それでも恩納村に二泊せざるを得ず、その結果、沖縄での時間に余裕ができた。そこで昨年十月に行つたときには「おんなの駅」で、もずく丼やかき氷を食べたり、恩納村博物館に行つて恩納の歴史を学んだりした。ちなみに、恩納には「島」という料理屋があつて、恩納をフィールドの一つとしている同僚の大元さんに行きよう勧められているのだが、いつも定休日と重なつておりまだ行けていない。残念だが今回も定休日だった。

今回の滞在では「美ら海水族館」にでも行つてみようかと思つていたのだが、地図を見ていたらお隣の読谷村に「や

ちむんの里」があることに気づいた。バスの便を調べたら仕事までに問題なく行つて帰れることがわかったので、「民藝」に関する講義でお世話になつている鳥取民藝美術館の木谷さんに、「明日やちむんの里に行つてみようと思います」、というメールを送つてみたところ、ぜひとも読谷山北窯の松田共司さんに会うべきだという旨の返信を頂いた。そういう経緯で、鳥取の土産も持たずに共司さんに会いに行つてみた。

沖縄のバスが時刻表通りに来るか非常に不安だったので(何度か痛い目に遭つている)、10分くらい前から待つていたところ数分遅れでやつてきた。滞在していた富着から喜名まではバス、そこから少し歩けば読谷やちむんの里である。途中、喜名古窯跡があつたけれども仕切りになつているガラスが曇つていて中は見えなかった。やちむんの里を一通り歩き回つた後に、さあ挨拶するかと北窯の工房に行つてみたらコロナの関係で立入禁止になつていた。仕方ないから今回は帰ろうかと思つたが、ダメ元で売店の方に鳥取から木谷さんの紹介で来たということを伝えたところ、松田さんは他の用事でお出かけ中だったにもかかわらずすぐに戻つてこられた。

共司さんとその息子さんが昨年11月に開かれたカフェでコーヒーを飲みながらお話を伺つた。かなり美味しい

コービー。木谷さんから事前に、延興寺窯の山下裕代さんが共司さんのところで修行されていたことを伺っていたのと、山下清志さんと裕代さんのお話を講義で聞いたことがあったので、そうしたエピソードを話す一方、鳥取の民藝の状況についていくつか質問されたので拙いながらも見

知っていることをお伝えした。その後、共司さんの工房や北窯の登り窯などに連れて行っていただき、いろいろ教えていただいた。私の出身が島根の大田ということもあり、温泉津の森山窯の話をしたところ、森山窯からも修行で超越しになっていったとのこと。工房で働いている若い方々も全国から修行に来て、そうして弟子たちは再び全国に散らばっていく。このように次世代が育っているわけだが、やちむんの里それ自体はどのように次世代に引き継がれていくのかだろうか。共司さんは鳥取での後継者問題についても関心をもっていらっしゃった。実はこういう弟子たちにも囲まれた親方と工房という生活形態を私も少し知っている。というのも、私の祖父は大工の親方だったからである。祖父は私の父の弟を弟子にしていたが、彼は継がなかった。私もこうして鳥取にいる。やちむんの里について言えば、第一世代である故金城次郎氏たちの窯、第二世代の読谷山窯、第三世代が共司さんたち読谷山北窯なのだろう。次の世代の為の土地構想がある(あった)そうなのだが、それは

どうなっていくのだろう。民藝の工人としてではなく、陶芸作家として作陶した方が食べていけるといいう流れが厳然としてある。民藝は無名である、というのが柳宗悦の思想であるが、共司さんは、濱田庄司や河井寛次郎が作家だったことを指摘することも忘れない。

再び工房に戻り、民藝の美について少し話を聞いた。そこで伺ったのが、蝶の美しさの話である。民藝の美は、職人の作為を排除する。繰り返し繰り返し手作業していく中から結果として生まれる美である。自然の美しさもこれと同様に「作為」による介入のない美である。進化論的に、結果として、あのように美しい蝶が、今いる。民藝の美とはそのようなものだ、と共司さんは理解されているのだろう。私はそれを聞いて、ヴェイユも同じようなことを言っていたことを思い出した。「美とは偶然と善の織りなす調和である」(『重力と恩寵』岩波文庫255頁)。蝶は自ら求めて美しくなったのではない。「美とは偶然と善の織りなす調和である」(『重力と恩寵』岩波文庫255頁)。「偶然」というのは作為がないということであり、「善」とはムーサが詩人を通してミュトスを謳うように職人が神の依代となっている状態のことだろう。蝶は自ら求めて美しくなったのではない。

## 卒業式 オフ 卒業式

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

別れと出会いの季節。このコロナ禍では、卒業式を普通にやることも難しい。三月中旬、中学生の次男の卒業式に参加したが、歌の合唱無し、一人一人の証書授与無し、という非常に簡素化されたものだった。

自分の卒業式は、ほとんど記憶に残っていない。小学校は、全員がワンフレーズあるかけ声に参加した。ミスらないように必死だった。中学校は、本番前にひたすら「蛍の光」を練習させられ、体育館の寒さを味わった。浪人決定で参加した高校生は、これから宙ぶらりんになるという不安だけが残っている。

私にとっての素敵な卒業式は、不思議なことに、自分が当事者のもではなかった。保護者として参加したり、取材で訪れたりした卒業式の中には、なかなかのものがあつた。

### ■ 珠玉の校長先生のお話

「中学校の思い出を胸に、高校での飛躍を期待する」など、ありきたりの話が多い校長先生。その中でひととき輝きを放っていたのが、一昨年春に中学を卒業した長男の卒業式だった。漢文学を専攻する大学教授の校長が式辞で、卒業生の「今」を人生の朝に例え、「学びはまだ始まったばかり」とまず伝えた。そして、自らが市民対象に教える漢文教室に、かなり高齢の参加者が参加していることを引き合いに出し、人生の「日」が暮れようとしているにもかかわらず、「授業料まで払って学び続ける姿勢にただただ頭が下がるばかりだ」と敬った。たぶん中国の故事を引用していたが、それは忘れた。

決して派手ではないが、学びは一生続く長く地道な営みだ、という壮大なメッセージを、高校受験で疲れた生徒らに贈ったように思えた。聞き入った学生も多かったのではないだろうか。私も改めて、学びとは何か、と考えさせられた。

### ■ 亡き友へ手作り卒業アルバム

東日本大震災が起きる十日前の2011年3月1日、当時は伊賀支局員だった私は、三重県のある県立高校の卒業式取材した。きっかけは、卒業式の数日前に支局に入っ



た、他校の知り合いの教頭からの電話だった。「卒業直前に亡くなった生徒のために、友人たちが写真アルバムをつくるらしい」

2月中旬、伊賀市に隣接する名張市で、住宅が全焼し、母親と娘が亡くなる火事があった。この時点で、県内の別の記者がストリートニュースの記事にしていた。が、その時点で私は「2人死亡」という事実以外、詳細をほとんど認識していなかった。

まず、事前に父親に時間をつくってもらい、話を聞いた。友人たちのアルバム作りは、火事でほとんどの写真が消失したため、父親が娘の同級生に写真の提供を呼びかけたという。

卒業式当日に取材で訪れると、学校側は火事の前日まで皆勤で卒業要件を満たしていた女子学生に、番号入りの正式な証書を用意していた。式後に、担任や同級生が、集めた修学旅行などの写真約五十枚でつくりあげたアルバムを、教室に招待した父親にプレゼント。「この場に私がいて良いのか」と戸惑いもしたが、大切な時間を部外者にも共有させてくれたことに、今でも感謝している。

この過程をまとめた記事が卒業式の翌日、伊賀版と名古屋本社の社会面に掲載され、私は報告とお礼を言うために、父親を訪ねた。当初は取材を受けることそのものに、ため

らいがあったようで不安だったが、「特ダネだね」と笑ってくれて、ほっと胸をなで下ろした。「忘れないために」が、書くことと理由であると教わった。

◇

次男の卒業式の前夜、京都の自宅に久しぶりに帰省して家族5人で鍋を囲みながら、この2つのエピソードを振り返った。

# 大きな物語に巻き込まれないという」と

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

私は一九九五年一月に生まれた。

阪神淡路大震災の四日前だった。

東京出身の私だが、祖父母は当時も神戸のあたりに住んでいたの、生まれてすぐの私を日帰りで見舞って、被災した。東京にいる両親は、病院でニュースを見るしか術はなかった。

小学生の頃、私は神戸で過ごしていた。私が毎回疎外感を感じていたのが、この時期の「宿題」だった。家の人にその日の話を聞けというものである。小さな赤ちゃんと共に避難所生活をした両親の話、本棚が自分に向かって倒れてきた話などを聞いてくる友人達の一方で、私はしようがなく防災館に行つて情報をまとめたりした。

私は東京の人間だと思つた。

中学に入って、東京に引越した。

一月十七日にあれだけ式典をしていたのも嘘のように、平凡な一月の一日に変わった。私が気まずい思いをする宿題とおさらば。場所が変われば、祈りの重みも簡単に変わってしまう。神戸のあたりはあの日で全てが変わつたのに、テレビではただの地方ニュースとして流れていた。

それで本当にいいのかとどこかで引つ掛かりが生まれて、私は神戸の人間になつていたのだと思つた。

鳥取に来て、二〇一一年の東日本大震災の時の話をする事があつた。当時、高校生だった私は、たまたま友達と神奈川の海沿いに出かけていた。津波の警報が鳴つた上に、電車が止まって帰れず、停電した学校の体育館で一晩過ごした。その時は、東北の津波のことなどほとんど知る由もなかった。

子供の頃から聞かされていた「避難所生活」をする側に偶然にもなつてしまった私は、自分が大きな何かの一部になつていることを同時に感じた。大きな地震という大きな物語の中に組み込まれていくような。

一通りそんな話をして、「東京の方は鬼気迫る状況だったんですね。」などと言われてしまったが、実は私の遠縁の親戚たちは仙台にいたものだから、それに比べて言えば、ほとんど苦労しなかつた。それでもあの日のこと

を思い出せるのは不思議だ。もう十年経つというのに。

あの日の話をしていた自分は、東京の人間だった。

知らず知らずのうちに私は、「震災」という大きな物語を通して人生を、自分のアイデンティティを捉えてしまう。

私が大きな物語の一部になるのが苦手なのは、私が「震災」という言葉を聞いたときに感じる浅はかな当事者性のせいだ。

私は真実その苦しみを知ることにはないのに、世の中はそれに寄り添い、乗り越えろという。そんな時の外野の人間の非当事者性が、時に人を傷つけることもあるし、無関心な態度が絶望を生むこともあると分かっているからこそ、安易に態度を決められない。私はいつも中途半端な当事者だった。

「震災」の被災者として括られても、それぞれに見つめた景色は全く異なる。私のように一日だけの避難生活をした人、私の父のように帰宅困難者になった人、津波に遭遇した人、事故に遭遇した人。津波警報を聞いた場所でも、私は神奈川の方だったから、実際には津波を見ることもなかったし、実際に生まれ故郷が飲まれていくのを目の前で見た人もいる。果たして、それら全てを「震災」という大

きな物語に押し込んで、「さあ前を向こう」ということだけが正解になるのか。その大きな物語の波の中で、消されてしまう一人一人の物語があるのではないか。

祖母が神戸から引越す直前、仙台の親戚が訪ねてきた。阪神淡路の震災の時は神戸に、東日本の頃には仙台で暮らしており、被災したものの無事だった。

「神戸の震災の時、おじさんが私の家の方まで「大丈夫か」って来てくれましたよね。それにねおばさん、「こんな時こそご飯食べないと」ってカセットコンロで料理して。それでみんなにご飯振る舞って。」

その日までの二十年弱、私は祖父母があの一月十七日をどう過ごしていたかを知らなかった。料理をして人を元気づけようとする祖母なら、あの日をそうやって生き抜いただろう。私はやっと「宿題」の「答え」を得た。

私は永久に「あの日」を経験することはできない。それでも、「あの日」を知ることが、それだけができる。そのたった一ページのために生きるのであって、皆で一緒に大きな物語に巻き込まれる必要はないのだ。

# ケアとセラピーをめぐる I

松田 裕史

(高校教員)

二月に入ると二五日から始まる大学入試の二次試験に向けて添削指導も佳境に入る。一九日(金)に預かった添削ノートを学校で処理しきれず、土日でじっくりと取り組むこととなった。

週が明けて二二日(月)、ノートを受け取りに来た生徒にポイントとなる所だけを問答しながら返却。返却と、この日に新たに持参されたノートを添削していて昼食をとる間もなく一日が過ぎた。

夕刻になっても添削し終わることができなかったノートが一冊。それは生徒Tのものでその日のうちに返却しようとしたが分量が多かったため断念した。そのことを直接伝えることもできなかった。家に電話をかけた明日の午前中に取りくるように家族の方に伝言を頼む。幸い学校から家が近い生徒であったが、出発の前日に当たる日にわざわざ徒歩でノートを取りくるかどうか不安があった。

午後一七時二〇分、生徒Nがノートを受け取りに来る。

一〇ページ分の添削を一緒にざっと見直す。話が終わりノートを閉じ、Nは立ち上がったところで、「明日の午前中、もう一度見てください。」と声を絞り出すように言った。明日の二三日(火)は天皇誕生日で祝日なのだが無下に断るわけにもいかず、一〇時に来るようにNに指示。

二三日、午前一〇時。職員室にいたのは僕を含めて二人。五メートル以上離れたところからパソコンを打つ音が断続的にカタカタと僕の席まで聞こえてくる。入口近くの水槽からは時折、ブクブクと自動ポンプからでた気泡の音が漏れ出る。五分後、すりガラス越しに人影が見える。

Nが静かに挨拶をして入ってきた。Nからノートを受け取り、チェックしている間は自習室で待つように言うと、Nはノートが不在になった手を手持ち無沙汰のように揺らしながら自習室へ向かう。

ほとんど見終わったところでTがやってきた。

昨日のうちに添削が終わらなかったことを謝罪し、隣にTを座らせて解答と一緒に確認する。分量が多かったため、やり取りに二〇分近くかかった。

ペコリと頭を下げ、「これまでありがとうございます。」とTは帰路に就いた。

次はNの番だ。

先ほどと同じくNを隣に座らせ、英文エッセー二本を

一緒に見直す。やり取りは一五分ほどで終わったがそこからが長かった。新しいタイプの問題が出るのではないか、数学が不安だ、過年度の合格最低点にとどくのかどうか、他の受験生のこと、クラスのこと、受験地までの移動手段のこと、コロナのこと、不合格だった場合のこと、大学で学んでみたいこと、将来のこと……話題は多岐に渡った。試験二日前とは思えない不安や疑問もあるが、とにかく不安であることがひとと伝わってきた。

僕ができたことといえば、単に聴き、頷き、時に復唱し、受け止めることだけだった。

一二時を告げるアラームがどこからともなく聞こえてきた。ふうと小さくため息をついたNは、何も言わずに帰り支度を始めた。

食堂にある自動販売機でインスタントコーヒーを買うついでに、Nを途中まで見送る。Nにも何かドリンクを選ぶように促す。

「どれがいい？」

「こんにやくゼリーです。」

僕は一八番のボタンを押す。ガサリと直方体のこんにやくゼリーが落ちてくる。それをNに手渡す。Nはゆったりとした足取りで勾配のなだらかな坂道を下りていった。

\* \* \*

一年前に東畑開人の『居るのはつらいよ ケアとセラピー』についての『覚書』（二〇二〇「紀伊國屋じんぶん大賞」第一位）を読んでから「ケア」と「セラピー」のことが時折気になる。自分が誰かに行っていることがケアなのか、セラピーなのか、あるいはその両方なのか……。「ケアとセラピーは人間関係の二つの成分」であり、ケアは「傷つけない。ニーズを満たし、支え、依存を引き受ける。そうすることで、安全を確保し、生存を可能にする。平衡を取り戻し日常を支える。」セラピーは「傷つきに向き合う。ニーズの変更のために、介入し、自立を目指す。すると、人は非日常の中で葛藤し、そして成長する。」人格の完成や志望校合格など、様々なフェーズで、ある目標や目的を達成しようとする機関・制度である学校ではセラピー思考が優位に働くだろうし、市場主義原理にもなじむ。だが、そのセラピー思考のみで物事を動かそうとするところに歪や断層が生まれうることを実感してきた。TやNに対する僕の思考や言動はケア的だったのだろうか、セラピー的だったのだろうか。

# 「学び祭」の頭の中

芝野 浩貴

(地球探究家)

丑年も3ヶ月が過ぎた。牛痘・vaccine を連呼する時間が続く。DNA→RNA→タンパク質のセントラルドグマに逆問題を当てはめたらワクチンは進化するか？1年前は数学的ではないコロナ対応にイライラしていた。今でもその時の肌感覚は失ってはいない。(音信不通46号)ほとんど全ての人は雑誌や映像で描かれているウィルスを想起していると思うが、どう動くかは個人個人の頭の中であり、その人の思考の仕方がウィルスへの取り組みと重なる。思考停止しているとウィルスも留まったまま増殖する。オートポイエーシスの考えを持ってば、ウィルスも均等に拡散して収まる。そこに、「やつてくる」か。例えば自国中心主義でワクチンを数ヶ国だけが抱えてもパンデミックは収まらないことはわかっている。かつて日本が誇る数学者の伊藤清が発見した△伊藤の公式▽に経済の頭が入ると破綻した。もちろん経世済民の意味では使っていない。だから、△頭の中に入る▽

認識は脳がするのか？S Fが現実になるのは何故か？人間の歴史の方が言語よりも古い。名前が先か、ものが先か？超越と実存。狩猟型の時は言葉はいらぬ。ありがとうもごめんなさいもいらぬ。またぎが熊を得たら皆に分け与える。ラメララ村で鯨を獲れば皆で分け与える。

統治主義と多様性の対立はなく、共生はある。

獲るまでは統治的だが、獲ったら民主的になる。それが生存戦略だ。民主主義とは何か？

資本主義でも共産主義でも社会主義でもない。

フランス国旗の色ではないが、人類は常に△自由対平等▽に悩まされてきた。リベリズムとリバタリアニズムとコミュニティアリズムにおける自由と平等の割合。○○主義は危険だ。人間の脳の中で行われる自由意志。自由論で均衡するか、社会的共通資本とコモンで負債を止めるか。宗教によっても変わる平等の意味。無宗教も宗教か。やまと教はどうなった？令和時代に「三教指帰」や「三酔人問答」を唱えるときの△▽は何を意味するのか、3.14159265

：

学際融合と地域探究の始まる教育。一般意志を考えよう。人類は言語・貨幣・法を生み出し、△民主性▽を問うが、アローの定理も解決できずに、AIに駆逐されてデカルトからベイトソンへ。ダマシオがデカルトの誤りとして

情動を先行させると「感情論」となる。言語は文化に左右されるならサピア・ウォルフは、感情論では構築主義時代や文化に形作られる)を取るのか? チョムスキーは認知科学や神経科学を学んで普遍主義(感情は人類は共通)を取るのか? アンドロイドが羊の夢を見て、ロボットに心はあるなら、「ドラえもんを「ドラえもん」と呼ぶ人がいたら「ドラえもん」になるという、ユダヤ人からのアナロジーになるユダヤ文化論へ帰着される。IGBTAQのアルファベットのどこまで続くのか。言語論も記号論も新記号論と言語存在論へ移る。新貨幣論はあるのか、「論語と算額」を超えて。エントロピーの増大は進化論にどう影響を及ぼす。AIとIDのインテリジェンスの違いは何か? 自動運転を超えて生命数理として粘菌はどこまで通用するか、最短経路。ブロックチェーンに新しいハッシュ関数を入れるとBIは可能か。止まったデータは死んだ過去の幻想。大森荘蔵が怒るだろう。夢や過去の意味を間違えている。過去など存在しない、夢など存在しない。過去や夢の想起体験があるだけだ。時間論を学びなさいと。まずはt分布から始めよ。時間が経ち、自由度を変えると正規分布になる。動かし続けると条件付き確率から圏論へ。統計は「生き物」である。その「生き物」が確率解析のファイマンから微分方程式の数理科学へ変わる。免疫の意味論とSIR理論

の感染症曲線。中村桂子が脳と免疫の中に生命誌を投げ込む。ロジスティック曲線とシグモイド曲線が似ているなら、全脳エミュレーションで「コロナと学び」がデュアルであることがわかる。AIのプログラムとウィルスの狭間に立ち、人間論を構築すれば、人間の特徴が「間の研究」に行き着くことに気がつく。「甘えの構造」や「いきの構造」とも協奏したらいい。死者は弱いのか? 弱さの力は強い。強弁は弱い。フラジイルな強い中空均衡はどこへ行った。人間よ威張るな! 人より植物の歴史の方が古い。動く植物、考える植物に学べ。飼ひ慣らされない植物の知性へ。菌はもつと古い。あの壁を壊す動きはチンダル現象? ランダムウォーク? 目に見えない複素数が繋ぐ。シュレディンガーがインテグラルで、インテグラルがドーキンスなら、ハイゼンベルクが行列で、代数としてのシグマがグループになる。リミットでシグマとインテグラルは繋がるか? 相対論と量子論の止揚で「万物はひも」となるか?

それを発見する人類の脳への回帰。再帰する。

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より頭の中は広い」と言った広田先生は何人いるのか。パラドックス論を「入れ子」にして、右に述べた思考を分担して繋がる「高校生の頭の中」に4月は潜入中である。

## カーマニアの明日はどっちだ？

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

昔、『ガタカ』というSF映画（1997年）を観た。遺伝子操作で生まれた「適正者」と自然妊娠による「不適正者」が暮らす近未来を描いた、割合と地味な映画なのだが、その中で「おや？」と思った場面があった。

車である。主人公が乗っているのはスチュードベーカー・アヴァンティ（1963年型）というかなりマニアックな車。彼女の車は、私も好きな仏のシトロエンDSの珍しいカブリオレ（1965年型）。さらにシトロエンの影響を受けた英国車ローバーP6も登場、近未来なのに60年代の懐かしい車だけだ。ところが、それらの車は駐車場コードにつながれている。そう、外見は古くても、どれもEVカー（電気自動車）なのだ。

◆ ◆ ◆  
十数年前、映画は現実になった。当時、仕事で「中古車フェア」を主催していたが（在職中は本当に何でもやらされたなあ）、ある中古車屋が、これまた私が昔欲しかった

シトロエン2CVを出展していたので「これ売り物なんですか？」と聞くと、「古い車をEVカーに改造するサービスをしているんですよ。これは大山のペンションのオーナーに依頼されて改造した車」という答え。

古い仏車をご存知の方なら分かるだろうが、昔のシトロエンやルノーはギアチェンジにかなりコツがいる。「ところがEVカーになって、もうオン・オフ、ペダルを踏むだけですから、『運転が楽になった』と満足していただいています」。なるほどね。

◆ ◆ ◆  
安月給で生活が苦しいくせに、二十代で中古のVWゴルフを買って以来、ずっと外車を乗り継いできた。バイク時代からひいきにしていたホンダをはじめ日本車が次第につまらなくなっただけのこともある。今や欲しい日本車はほとんどない。アルト・ラパンぐらいか（笑）。

昔は「容疑者は外車を乗り回すなど派手な生活……」といった新聞の常套句があったぐらいで、誤解も受けたが、外車に乗って楽しいのは（少々大袈裟だが）お国柄や文化的背景が伝わってくることだった。

VWの初代ゴルフは、ジュリアーロのデザインによる質実剛健を絵に描いたような車だが、シフトノブはなんと「ゴルフボール」の形をしていて、クスッと笑わせる。



ドイツ人はこのゴルフの車体のように四角四面、堅物のよう  
うで、案外遊び心があるのかも知れない(後にドイツ青年  
と職場で一緒に働いたが、その通りだった)。

まだ英国製だったミニは、雨水が車内にたまる、排気管  
が落ちるなど大変だったが、不屈のジョンブル魂!!「壊れ  
たら直せばいい」の精神を学んだ。サーブは、安全性を北  
欧デザインで包み込んだ優雅で快適な車。残念ながら今は  
戦闘機しか作っていない。

スバルのトラヴィックはGM傘下のオペルが設計、タイ  
の工場で組み立て、エンジンはGMという「コスモポリタ  
ン車」。独の高速安定性と強力な米国製エンジンのおかげ  
でミニバンと思えない走りだったが、スバルは「こんなん  
ウチの車でない」とオペルの同型車ザフィーラより格安で  
売ったため、業績不振のオペルは日本から撤退…という「い  
わく因縁付き」の車。どの車にもドラマがあった。



車がいらなかつた東京生活が終わり、「さて、久しぶり  
に何に乗ろう」。頭に浮かんだのがVWビートルだった。  
水平対向のリアエンジンではなく、中身はゴルフの「なん  
ちやってビートル」なのだが、一昨年に生産終了。ヒット  
ラーの「国民車」以来、80年の歴史の幕を閉じた。

乗って驚いた。やたらマイルド、エンジンは1200cc

しかなく、しかも低燃費。「そうか、ドイツ人は今、エ  
コロジーばかり言ってるからな」。ところが、である。  
年明けの大雪でスタックし、あつけなくミツションが壊れ  
た。昔のゴルフはスキー場もワシワシ登っていたのに。

いつもの自動車屋に持ち込んだが、「残念ながら電子制  
御化されたミツションは『ブラックボックス』で、デー  
ラーしか直せません」。なんてこった! VWも、今はB  
MWに受け継がれたミニも、低燃費で高性能を引き出すた  
め電子制御が著しく、よく壊れるという。



「ガソリン車時代のたそがれ」である。内燃機関の自動  
車の進化はもはや限界、行き着くところまで行ったのだ。  
そもそも若者は車自体に関心が薄く、そのうち街で軽自動  
車やEVカーをシェアする時代が来る。行き場を失ったカー  
マニアは「昭和の車」に食指を伸ばしているが、部品の確  
保など、維持は並大抵ではない。

その時、思い出した。そうだ、『ガタガ』の手があるで  
はないか。壊れたら外側だけ残して、中身はEVカーにす  
ればいい。それまでは「いつまた壊れるか分からないので、  
冬場はなるべく走らないように」という自動車屋の忠告を  
聞いて、腫れ物にでも触るようにそっと運転している。

# 八代日記

(十三)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

三月某日

例によつてサッカーニュースを毎日チェックしているが、久しぶりにマッシミリアーノ・アツレグリがインタビュに応えていた。アントニオ・コンテからユベントスを引き継ぎ、就任後にセリエA五連覇を達成した監督で現在は無所属。

ユベントスの現状について話したあとに、現在のイタリアサッカーについて、「イタリアでは、選手がまるで監督が素晴らしいということを証明する道具のようになっていゝる。あるいは、監督の価値を証明するための楽器だ。それは有るべき姿ではない。」とのコメントが掲載されていた。

例えに「楽器だ」と出てくるところにヨーロッパらしい教養を感じてしまう。指揮者と演奏者＝監督と選手の関係性についてのアツレグリのスタンスが表れているし、カルチョを音楽のように捉えていることに感心した。90分の間に様々な要素のぶつかり合いが起きたり、ディテールが

絡み合ったりして、時間の流れに起伏が生まれる（もしくは起伏が発生しないゲームも有ろう）わけだから音楽的と言えるかも知れない。

三月某日

長男が甘いものを食べ過ぎるので叱ったら、ほつぺたを膨らませて口を尖らせて涙目でもつと食べるのと抗議してきた。怒るときにはほつぺたが膨らむのはマンガの中だけだと思っていたが現実に見ることができて感動してしまい頭を撫でてあげた。それを見ていた妻が「はらかいたとね。よしよし。」となだめる。

「怒る」ことを熊本弁で「はらかいた」と言うが「はら」が腹なのか原なのか何なのか、「かいた」が何なのかいまひとつはつきりわからないので自分はあまり使わない。腑に落ちていない言葉は使いつらい。

「怒る」と書いたが「はらかいた」の怒るは、叱る方の怒るではなく、腹が立つ方の怒るだ。咎められたり、気にしていることを言われたり、したいことを遮られたときの、不機嫌といじげが混ざった怒りだ。少し子どもっぽさが含まれる。つまりいい大人ははらをかかない。はず。なので、自分がいい大人だと思っている人にはらかいたとね、と言うと揉め事になる可能性があるので注意が必要だ。

三月某日

バンドの歌詞を文末に掲載しないと自分のページを埋められる自信がない、と先月号に書いた。そうしたら奈良さんより「熊本視点の世界観のようなレポート」を書いてはどうか、とのご提案をいただき。まずは「熊本は九州のヘソ」であるか？との問いに答えて欲しい。とも。難題だ。藪蛇だったか…。

自分は大学に入学した1998年から東京に住んでいたけれど訳あっていやそなたにたいした訳もなく何となく帰りたくなって2016年に熊本に帰った。

帰る際に軽薄な私の後押しとなったのが、熊本にはファンであるドイサイエンスというバンドと石頭地蔵というバンドがいたことと、これまたファンである石牟礼道子、渡辺京二、坂口恭平が住んでいるということであった。この5組を全て好きだという人とは会ったことはないが数人は居るんじゃないかな。居たらお手紙ください。

そんなわけで帰郷した際の熊本は私にとっては九州のヘソだったと思う。強力な磁場があった。3著者については言うまでもないけれど、挙げた2バンドは独自の音楽を長いこと続けていいつも刺激を受けている。

ひと昔前はファッションでも福岡よりも先をいく町で

あったらしい。自分があまりファッションに通じていないのでよくはわからないが確かに街中の服屋の密度がすごい時期があったような記憶がある。(しかし「ファッション」て言葉、すごく古く感じませんか？今どきは何ていうんだらう？スタイルとか？)

自分は方向音痴である。ナビがないと配達先にも着かないのでiPhoneの充電を切らさないようにいつも神経を尖らせている。方向音痴というのは空間の認識能力が足りないのか、断片的にしか景色を把握できていないような気がする。「世界観」というのはものごとの連続を把握できないと捕まえられないように思うので、やはり自分には難しい課題ではあるが少しずつ書いていってみようと思う。

三月某日

店舗の社員さんがひとり退職してしまい、求人を出しているのだが間に合わず自分が店舗の仕事にかり出されている。ハローワークに問い合わせに行ったが、八代は現在、求人に対しての応募数が半分くらいしかないということだった。地方都市の人手不足問題に直面し、慣れない包装業務に緊張している。

## 画中人

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

美術展覧会に足を運ぶと、時折、ああこの絵の中に入っ  
てみたい、と思う作品に出くわすことがある。

ブリューゲルの「バベルの塔」がそうだった。小さい絵  
にも拘わらず、微細に描き込まれていて、塔の各層を尋ね  
歩いてみたいと思った。後に、大友克洋が断面を補作した  
ものが発表され、より具体性が増し、一層思いが強くなっ  
たことだった。

シーシキンのロシアの雪解けの森やバルビゾンの薄暗い  
水辺、コンスタブルや初期ターナーのピクチャレスクな庭  
園山野、ユベール・ロベールの遺跡など、やはり緻密に描  
かれた風景画に惹かれるようだ。

とは言いながら、ポール・デルヴォーやドウグーヴ・ド・  
ヌンクのような幻想的な光景にも憧れる。前者は、ギリシャ  
神話風の街並みの中に、何故か近代の停車場があり、蒸気  
機関車が停車している。広場には寝台があつて薄物を纏つ

た女が横たわっている。全ては月光の儂い光の中である。  
妙に幾何学的で、象徴的で、非現実的な風景にも惹かれる  
何かがあるようだ。

初めて、絵の中の風景に入ってみたいと思ったのは、小  
学校三年の時だったと思う。

音楽室の正面、黒板の上に一枚の風景画が掲げられてい  
た。普通、音楽室には、楽器メーカーの拡材である楽聖た  
ちの、苦虫噛み潰したような肖像画がズラリと並んでいる  
ものだが、この学校はなぜか風景画だった。

「田園」や「スプリング」や「鱒」を想起させようとい  
う深謀遠慮だったのか、仔細は知らないが、名曲鑑賞でも、  
ケテルビーやマリーくらいがせいぜいの小学生には、想像  
が及ぶ筈もなかった。

件の風景画は、極ありふれていて、今日の自分が見れば、  
可もなく不可もなく、と評したかも知れない。とはいえ、  
複製になるくらいだから、それなりに有名作品ではあつた  
のだろう。

画面の下三分の一くらいに、右から左に(逆かも知れぬ)  
ゆるやかな小川が流れ、両側に並木が植わっている。背  
後には田園と青空が広がっているという、まあ珍しくな

いヨーロッパの風景、それだけの絵ではあった。

ただ、無性に、この絵の中に入ってみたい（暮らしてみたい）と思ったのである。工場の煤煙や排気ガスまみれの大都会ならいざ知らず、絵に劣らないくらい田舎町に住んでいた子供が考えることではあるまい。

その後、似たような風景画を目にする機会は何度かあったが、どうにも決め手に欠け、さりとて本気で調べようにも、画像がなければどうにもならず、偶然頼みの神頼みの状態が続いている。

そうこうする内に、肝心の絵柄の方が、記憶の減衰と共に曖昧になり、今や、本物が現れても、同定できるかどうかすこぶる怪しいという体たらく。

絵の中に入るといってお話は、例えば、『聊齋志異』に壁面の天女に惹かれてうっかり壁の中に入ってしまい、懇ろの仲になるといふのがある。

乱歩の「押絵と旅する男」なども、現代バージョンと言つてよからう。

倉橋由美子には『幻想絵画館』という、このテーマにぴったりの作品がある。

ひと頃の総合雑誌には、必ずといってよい程、グラビア

と解説をセットにした美術紹介のページがあったものだが、この作品は、その体裁を装って「文藝春秋」に連載された。折込みのカラー図版と、それに触発された小説とである。単行本も、文芸書には珍しいB5変形サイズで、アート紙カラー刷りであった。

物語の殆どが、絵のイメージの中で展開し、実際に画の中に入るエピソードもある。作者は、この主人公・慧君が気に入ったと見え、その後「よもつひらさか往還」「酔郷譚」と、シリーズ化している。

つらつら思うに、人間、誰しもこういった欲望を持つているのではなからうか。ジオラマでリアルな住居や店舗を拵えて街並みを作ってみたり、ドールハウスに好みの調度を揃えてみたり、かと思えば、実景をわざわざミニチュア細工のように撮影してみたり。

ムーミンバレーパークやジブリパークといった、物語世界のテーマパークは実寸大の中に我が身を置くの謂いであるろうし、当節では、VRやプロジェクトジョンマッピングを使って、本当に絵の中に入る体験プロジェクトなども開発されているそうだから、驚きである。

# 鳥取あれこれ

## その五十六

内田 克彦 (地域研究家)

黒部峰三のことである。取っ掛かりは、県立図書館で見つけて頂いた『郷土とつとり 激動の百年』（一九六八年刊）の中の次の一行であった。

黒部峯蔵氏は画家黒部枯〔ママ〕華氏の令弟でバイオリンに秀で盛岡で活躍、晩年は鳥取県に帰り倉吉高女に勤めていた。作曲もある。

『因幡人事興信録』（一九二三年刊）で「黒部」を探すと、黒部拈華（ねんげ）の名が挙がり、「安政三年」に「大工町頭黒部権之介二男に生る本名は義暁」とあった。しかしながら、権之介は文久三年の「本国寺事件」で「因幡十二士」により殺されており、明治二年にその子として峯蔵が生まれるはずがない。さらに『鳥取県書画百藝名人集』（一九一五年刊）によると、拈華の項に「本部泰翁の義弟」とあり、『鳥取県人名鑑』（一九三〇年刊）には「故本部泰氏の弟で、黒部峯蔵氏は義弟に当る」とある。

そこで、本部（もとべ）泰（ゆたか）を調べると、一九八〇年三月二日付日本海新聞の南波翼志著「元愛媛県知事本部泰」によれば、天保四年に「黒部権之介の二男」として「栗谷町」に生まれ、弘化四年「わずか五歳で邑美郡栗谷町四〇番屋敷の、同藩士・本部平之丞の養子とな」って、明治元年三月に家督を継いだ、とある。『家譜』によれば、権之介の後を継いだのが弟の「勝次郎」で、明治四年に「権之介二男」の「藤蔵」が継いでいる。峯蔵と拈華、泰との関係がよくわからない。

それはさておき、岩手県立図書館に「峰三と石川啄木」との関係を書いた文献を照会したところ、細部にわたったの回答があり、さらに深く知ることができた。『岩手百科事典』で「黒部峰三」の項を書いた吉田久五郎著「岩手の音楽教育五十年の展望」（『岩手史学研究 第60号』一九七五年刊）に、黒部について次の記述がある。

二十三年六月鳥取県尋常師範学校卒業、二十九年東京音楽学校師範部卒業、後研究科に在席、三十一年九月から三十二年五月まで英人について英語学研究、三十二年二月から三十四年三月まで東京物理学校で俗楽研究、三十四年四月から三十六年二月まで〔岩手県師範学校

音楽教師として」在職、鳥取県出身

さらに「研究熱心で博い学識をもっていた」「作曲をし、音楽会をはじめ、唱歌集を作るなど、在職期間二年という短い期間のうちに多くの影響を県下に及ぼした人物」との記述があり、一九〇一（明治三四）年に、作歌、作曲「たてたて友よ」「秋の茨島」を作っている。

そして、中村洪介著『西洋の音、日本の耳』（一九八七年刊）には、後に啄木の妻となる堀合節子を熱心に指導した黒部について「従来啄木研究者によつて満足な説明が殆ど為されていなかった」として、

節子が特に音楽に傾倒し始めたのは明治三十四年、黒部峰三が師範学校に着任しその傍彼女の（私立盛岡）女学校（現在の盛岡白百合学園）の嘱託教師を兼ねて音楽指導に当つた時以来の事であろう。この年は彼女と啄木との恋愛が急速に進み出した年でもあった。黒部は明治三十五年四月から一年間、盛岡中学校の嘱託教師も兼ねて生徒に唱歌を教えたが、同校を半年後に退学した啄木も多少なりとも彼に接する機会があった筈だし、節子との話題に黒部峰三の名が上つた事は容易に想像し得

る。

そして、黒部は二年間で岩手を去り、一九〇三（明治三十六）年四月、山口高等女学校に赴任する。これ以降については、山口県立図書館でのご教示により、梶田清七編著『山口発信唱歌の軌跡』（一九九六年刊）に詳しい記述がある。但し、ここでは「黒部峰三」の表記である。

同時に山口県教育会裁縫音楽教員養成所の嘱託講師も兼務した。大正八（一九一九）年一月、山口高等女学校を依願退職し、翌九年一月には鳥取県東伯郡立実科高等女学校、同県立倉吉中学校の嘱託教師として単身赴任した。同十（一九二一）年四月、同県立倉吉中学校教諭兼県立倉吉高等女学校教諭に任ぜられ、昭和四（一九二九）年三月依願退職する（以下略）

続いて、「黒部が山口県の音楽界に遺した功績は大きい。」として詳しく書いてある。黒部は退職後、家族の住む山口に帰る。「自宅を解放して黒部家庭音楽会を興し、山田流箏曲師範の夫人が指導していた子弟も加え、和洋両楽の子弟養成に乗り出した。」そして、一九三四（昭和九）年七月に亡くなっている。二〇二一・三・二六

# 戦禍の楽人 結

武中淳彦(秦皇梅林 本名)

(楽人)

前回迄ご紹介した物語は3つの国(日澳、チェコ)2つの言語(邦独)に語られた重い想ひ出、三者三様、往時若い後輩であった筆者に極めて個人的、徒然に語られたものを書き起こした記録。無論発表等想定もされず、体験した年代、世代が同じ以外には何の共通点も無い筈、バラバラのエピソードなのだが、芸術家が或る日、フアシズム(或いは其れに蹂躪された)国家にあつて急遽拘束され、辿る運命の酷似してゐる様には唸らされる。硬直し、柔らかさを欠いた国家に翻弄され、徹底して無視される「個」の尊厳。自由を喪つた芸術家の脆さ、虚しさ。

お仕舞ひにまう一人、楽人の人生にスポットを当て全編の幕としやう。

其の名はK. アンチエル。言はずと知れた世界的指揮者、戦前順風満帆キャリアを積み重ね、師でもあつた名匠V.

ターリツヒの後継として名門チェコフィルハーモニーでは先代の手掛け無かつた(ヤナーチェク等を除く)現代音楽等も含む広範なレパートリーを誇り黄金期を迎えてゐたけれど、国策としての親ナチ化に伴ひ(ユダヤ系の彼は)其の座を追はれた計りか? テレージン、アウシュヴィッツへとお決まりの迫害コースを辿り、待ち受けてゐたのは妻子を含む一家虐殺と云ふ…余りに惨たらしひ運命。唯、彼だけが「世界的指揮者は生き残す事に価値がある」と、決して殺されなかつた…

やがて終戦。プラハに戻り再起「今度こそ!」やり直した筈の彼に然し平和は永く続かなひ。…プラハの春事件勃発、ソ連に拠る共産化に邪魔者は再び追放の憂き目を余儀なくされた。

穏やかで優しひ性格のジェントルマンもさすがに「心折れた」のではなひか!

渡米した傷心のマエストロを迎へたのは合衆国では無くカナダのトロント交響楽団、此処で小澤征爾の後継として音楽監督に就く。此の時代出逢つた楽人の一人にはかの鬼才G.グールドも居た。グールドとは幾たびか共演、筆者はベートホーフエンの第五、協奏曲「皇帝」の録画を通じて、彼の端正で律儀な指揮ふりを目にした。

人生の終幕、アンチエルは永住の地で倅せな晩年を送つ



た：やうに言はれる。

然しプライベートで、お互いアウシユヴィッツで連れ合  
いや家族を皆殺しにされた者同士の再婚であった夫人との  
間に漸く設けた2人の息子達を、理不尽な誘惑の魔の手に  
抛って麻薬漬けにされ不可解な死：へと至らされた事実を  
みると、まうアンデルセンの童話の主人公？ 或ひは新し  
いヨブの物語かと見紛ふばかりの不幸せではないか！此れ  
でもかと計りに：何処迄も悲劇を地で往く人物。

そんな彼の、即物的で慎み深く、これ見よがしの大袈裟  
な見栄を忌み嫌ふ芸風は、徒らに自らを主張せず、作曲家  
の心を鏡のやうに映し出す静かな芸術。

徹底的に悲しひ生涯を黙々と生き抜いた人の声が今、文  
字通り遺された音楽によってのみ語られる、

内側から訥々と…。

2021. 03. 19

今回の二枚

① D・シヨスタコーヴィツチ第五交響曲ニ短調作品47「革  
命」(1937)

② 同第七交響曲ハ長調作品60「レーニングラード」(1941)  
カレル アンチエル指揮チェコフィルハーモニー



## ミニチュア

あきの素生

(くうねるめがね)



小さいものには、不思議な魅力がある。ミニチュアとかジオラマとかドールハウスとか、そういう類のものの話だ。精巧につくられた小さいものには、それを成した技術に純粹に感動する。でも、惹きつけられる理由は、それだけではない気がする。

雛人形を飾るのが好きだった。特に、人形がそれぞれに持つ扇や銚子、鼓などの小物や、雛道具に心躍った。一年に一度、押入れの箱から出したときは、人形も道具も薄紙に包んである。それをかさかさとして開き、この刀は誰の、この笛は誰の、と目星をつけて、人形たちの白くすつと伸びた指に持たせていく。鏡台や針箱、茶道具は、蒔絵風の装飾で、小さい針山や茶筌がきちんとつくられているところが何ともよろしい。馴染みのない、この特別な道具を使ってみて遊んでみたいという気持ちはあったが、私にとって雛人

形は、気軽に遊べるほど親しめる存在ではなかった。大切なものだと子ども心に感じ、変にいじくりまわしたりせず、うやうやしく接した。

人形遊びはもっぱら、いわゆる着せ替え人形で嗜んだ。私が持っていたのは「リカちゃん」や「バービー」ではなく、「ジェニー」だった。金髪のサラサラストレートヘアで、リカちゃんより背が高い。お風呂で髪を洗われたのち、ドライヤーをあてられて、ファンキーなチリチリパーマになってしまったり、何年か越して買ってもらった家が「リカちゃんハウス」で、足のみ出すベッドに寝かされる羽目になったりと、少しばかり不遇な扱いを受けた彼女だが、それも持ち主の愛着ゆえということ許してほしい。元々の服装はどんなものだったか、残念ながら覚えていない。わが家のジェニーはあまり衣装持ちではなかったが、母がブラウスや着物を作ってくれて、それを着せるのが好きだった。小さな（小さすぎる）家に小さな服や靴。それらは、実在しないはずの小さい何かの気配、みたいなものをちよっぴりまとっていて、それが人形遊びの隠し味として機能していたのではなからうか。こびとや小さい者の話は、いつだって魅力的だ。ただの物陰や屋根裏や壁の穴に、現実にはない（はずの）広がりや想像を与えてくれる。

昨年、芽キャベツをスーパーで見つけ、ほとんど食べたことがないのでつい買ってしまった。キャベツのミニチュアだったからに違いない。大きめに切った野菜と一緒にポトフに入れたら、見た目にもおいしそうだろうな、と思いきざつと洗って、そのまま鍋に投入。できあがりを楽しみに、ことごと煮込んだ。トマト色のスープに、ごろごろのじゃがいも、にんじん、少しとろんとした玉ねぎ、ウインナー（厚切りベーコンもいい）と、芽キャベツ。さつそく芽キャベツから口に運ぶと…、苦い。気のせいだろうか、ともうひとつ類張ってみたが、やはり間違いなく苦い。期待していた分、失望の度合いも大きかった。大きな鍋でスープなどを作るときの常だが、野菜を小分けにして残すのを厭うて、玉ねぎひと玉、にんじん一本、じゃがいも三個、と丸ごと使うために、鍋いっぱいにできてしまう。一週間分は優にある。しかも、芽キャベツだけでなく、全体的に苦みが溶け出しているようだ。同じものを食べ続ける苦痛よりも、ぐさを優先しているのだから文句はいえないのだが、この苦いポトフをあと一週間も、と暗澹たる気持ちになつた。もう芽キャベツは買わない、と心に刻んだ。

にもかかわらず、先日、一年ぶりで芽キャベツを見かけたとき、その愛くるしい様子に、捨て置くことができなかつた。今度はおいしいかもしれない、と淡い期待を持って、

性懲りもなく買って帰った。

とはいえ、ポトフにするのはためらわれ、グリルで焼いて、オリーブオイル、塩、パルメザンチーズをかけて食べることにした。きみを諦めさせないでくれ、と半ば祈るような気持ちで口にしたところ、拍子抜けするほど食べやすく、ぺろりと平らげた。なんだ、去年のものがたまたま苦かったのか、諦めなくてよかったと喜んで、今月は芽キャベツについて書くことに決めた。そしてとりあえず調べてみたら、芽キャベツは苦みが強く、下茹でをした方がよいという情報がわんさと出てきた。キャベツのミニチュアだから、と簡単に考えていたが、似て非なるものだった。芽キャベツよ、すまない。今後は食卓に並ぶ機会も増えるはずなので、許してほしい。



# カエル姫



ドラメリア (座敷わらし)

姪と半年ぶりに会話をした。このコロナ禍で私も姉夫婦も実家に帰省することがなかったたので、顔を合わせるのは昨年の正月以来。それもスマホの画面上でのことだ。

「〇〇から話があるから、聞いてやって」と姉から姪に交代すると、恥ずかしそうな笑顔で呼びかけてくる。わたしが帰省のお土産代わりに送った本のお礼を、ということのようだ。

「〇〇ちゃん、四月から三年生だね」

「うん」

「学校は楽しい？」

「うん」

問いかけにこくりこくりと頷くたびに、癖のない長い髪が揺れる。少し見ない間にずいぶん女の子らしくなった。一昨年はまだ「なにかつくって」と十分ごとに折り紙を突きつけてせがんでくる子どもだったのに。「人間というより、ほとんどおサルではないか」と密かに考えていたのに。こんな世の中でもきつちりと時間は過ぎて、子どもはすくすく育っていくのだなあ。そんな感慨が胸に浮かぶ。

もちろん変わらない部分もあり、激しいカエル好きは健在だった。そして、一人称はやはり「ケロ」だった。「ケロはね、ケロは」としきりに自分のことを呼ぶのを聞くと、ほんのり疑問も……学校でもこれで通していると聞くが、二年生ともなれば女の子はおしやまだ。浮いているんじゃないだろうか。叔母さんとしては心配になるところだ。とは言え、彼女もそう遠くないうちにケロちゃん呼びを卒業するだろうし、「将来カエルになりたい」とも思わなくなるのだろう。ぐんぐんおとなになる少女の、あとほんのわずかの時間。

かわいカエル姫。それまでもう少しだけ、蛙愛する姫君のまま。



・編集後記……

合宿的なまたはステイホーム的な時間ができたので、普段読めないものをこの機会に！と意気込みましたが、結局はかどらず。読書も体力と余裕が必要ですね。

ドラメリア (編集長)

橋を渡ったところに本屋がある。そばの土手の桜が早咲きだった。花びらが風に吹かれて店内にも舞い込んでくる。「いのち」に追い越されないように本を読む日々がつづく。

奈良敏行 (発行人)